

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 7 月 30 日現在

機関番号：34502

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520086

研究課題名(和文)中国イスラーム「道学」思想の発展とジャーミー思想の思想系譜学的研究

研究課題名(英文)Philosophy of Dao Xue in Sino-Muslim education and its philosophic genealogy and relationship to Jami's philosophy

研究代表者

松本 耿郎 (MATSUMOTO, AKIRO)

聖トマス大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：00159154

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：革命前の回族の社会には伝統的な経堂教育が行われていた。この経堂教育では13種類の教科書を学習することになっていた。これらの教科書の最終段階では倫理・道徳に関する著作が学ばれた。それはイスラームのシャリーアの学習に始まり、ついで倫理・道徳的完成を目的とするタリーカの修行をする。この修行を終えるとアッラーに近づく修行をする。この修行がハキーカの修行である。この修行を終えるとアッラーに限りなく近づいた人間とみなされる。アッラーに近づきアッラーとほぼ一体となった人間が「全人」と呼ばれる。経堂教育においてはこの「全人」の養成が教育目的となっていた。この内容は『馬徳新哲学研究序説』において明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In Sino-Muslim society before Communist Revolution, Sino-Muslim students used to study 13 text-books in their theological schools. The 13 text-books learning was basic curriculum for bringing along spiritual leaders of Sino-Muslims. In curriculum of 13 text-books, the last part was called "Dao Xue" which means "learning toward Truth". This "learning toward truth" has two preceding parts. The two preceding parts are shari'ah program and tariqah program. According to their understanding of human science, human starts their human perfection journey from shari'ah program in which students learn law and regulations for human life. After shari'ah program, students enter tariqah program in which they are engaged in training for their moral perfection. After finishing tariqah program, students practise haqiqah exercises which means exercises for approaching the Truth. Those who most approached the Truth are regarded as Perfect Human. This perfected human was the final goal of the "Dao Xue".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：礼乗 道乗 真乗 全人 相近の理 先天 中天 後天

平成22年度～平成25年度研究課題(中国イスラーム「道学」思想の発展とジャーミー思想の思想系譜学的研究)課題番号22520086の実績報告

### 1. 研究開始当初の背景

平成18年から平成22年度までの日本学術振興会科学研究費補助金による研究「中国イスラーム山東学派におけるスーフィー哲学の受容と変容の研究」の過程で経堂教育の最終段階のペルシャ語作品の学習過程を「道学」と呼ばれていたことが判明した。平成22年から平成25年まではこれを受けて「中国イスラーム『道学』思想の発展とジャーミー思想の思想系譜学的研究」を行った。

### 2. 研究の目的

共産主義革命以前の中国における回族の経堂教育において「道学」と言い習わされている「学」の内容を明らかにすることが目的であった。共産主義革命以前の回族経堂教育の伝統は河北省周辺および天津にかろうじて残存していたので、この地域を中心に現地調査を行い、また雲南省にもわずかにその伝統が残存していたので雲南省においても現地調査を行い経堂教育のテキストの分析をおこなった。

### 3. 研究の方法

経堂教育を受けた経験のある老人からの聞き取り、および経堂教育文献の分析研究。

### 4. 研究成果

「道学」の内容を明らかにし、それが存在一性論における人間完成のための学びであることを確認するための研究論文の発表および図書の刊行を行った。

研究課題「中国イスラーム「道学」思想の発展とジャーミー思想の思想系譜学的研究」においては、共産主義革命以前の中国イスラーム教徒の社会に伝わっていた経堂教育の中で発達した13本経による宗教指導者養成のカリキュラムの最終段階が「道学」と呼ばれていた事実に着目し、「道学」の内容を明らかにすることを目指した。「道学」は主としてペルシャ語のテキストの学習に充てられていた。最終過程ではジャー

ミー(1414 - 1492)の“*ashi*” “*at al-lama*” “*at*”(光明の輝き)というアッラーの愛の形而上学の書物が学ばれた。このようなカリキュラムを作り上げた背景にはイスラーム神秘思想におけるアッラーに至る人間形成学の思想がある。それはシャリーア(宗教法規)、タリーカ(倫理思想と作法)、ハキーカ(アッラーへの到達)というイスラームにおける三つの部分からなる人間形成過程の把握に基礎をおくものである。このシャリーア、タリーカ、ハキーカの三段階は中国イスラーム教徒の間ではシャリーアすなわち礼乗、タリーカすなわち道乗、ハキーカすなわち真乗と訳され彼らの精神生活の基礎を構成するものである。この三段階を順を追って完了してゆくと、最終段階の真乗、すなわちハキーカにおいて生きながらにしてアッラーと見えることが出来ると考えられている。アッラーと見えた人間は完成された人間と見做される。そういう人間はジャーミー系統の神秘思想においては「完成された人間」*insan kamil*と呼ばれる。革命前の中国ムスリムの世界ではこの「完成された人間」になることが最終目的であった。「道学」とは要するに、道乗から真乗にいたるための学習を指していたと思われる。ところでこの「完成された人間」とはいかなる人間であるのかということは馬徳新(1794 - 1874)の『漢訳道行究竟』の中で明らかにされている。『漢訳道行究竟』はアジーズ・ナサフィー(? - 1300)のペルシャ語作品“*Maqsad-i Aqsā*”(遙かな目的地)の漢文訳書であるが、その翻訳は原文に忠実な訳というより一種の超訳というべきものである。当時の中国の読書人に受け入れやすい内容に変えられている。その個所を参考のために引用しておく。

二章は礼、道、真の三乗を明かにする。それ、人は分かれること上中下の三等となれ

ば、則ちその法にもまた三品あり。礼乗とは聖人の示衆の法なり。道乗とは聖人の自任の功なり。真乗とは聖人の獨踐の境なり。聖人の云うには礼乗とは吾が言う所なり、道乗とは吾が行う所なり、真乗とは吾が歴し所の境なり、と。凡そ道を慕う者は必ず礼乗の学を習うを先にし、而してその事を遵守し、之を行いて怠らず。礼乗に由り道乗へと進む。道乗に進めばすなわち加工進修し、功成り、修尽き、究を窮め既に通じる。道乗より真乗に進み、真乗にいたれば、則ち以ってその真光の顕露を期すべし。真光の顕露はすなわちその人の功苦の甚大によるのみ。おもうに聖人の言を法となす者は礼乗の人を為にす。聖人の徳を体する者は、道乗の人を為にす。聖人の得る所を得る者は、真乗の人を為にす。

若し三乗の全て無ければ、すなわち形は人類と雖も、その禽畜に近からざる者幾ばくならんや。真經に云う「心有るも主を悟ること不能、目有るも主を觀ること不能、耳有るも主を聴くこと不能、口有るも主を讚えること不能なれば、すなわち禽獸の類なり。かつ更に異類に若かず」と。

蓋し、物を論ずるに形を以ってし、人を論ずるに理を以ってす。人若し理に悖れば、論ずべきは無し。是ゆえに、人の理を具える者は人なりと知る。妖魔の理を具える者は妖魔なり。禽獸の理を具える者は禽獸なり。三乗の説は実に以ってその人と為るを全うするなり。心有り道を望む者は必ず語言は真詳、性情は和平、行為は端莊、身は功苦を有し、心は戒慎を存すべし。更に、明師の指示を得て、始めて真主の獨一なるを知り、而して、萬有の原、造花の妙なるを知れば、是すなわち所謂真人なり。既に修真道義が此れの如きなるを知れば、須らく妄言を謹戒し、聖訓を持守すべし。若し言有れども行い無く、表有れども裏無ければ是小人なり。儒の云う、君子は言に於い

て訥にして、行に於いて敏なることを欲し、事に於いて敏にして（論語里仁第四）言に於いて慎み、有道に就きて正す（論語学而第一）と。この謂いなり。真經に云う、惟真効は人を上に渡すを以って可なり、と。それ道乗の当に尽きんとする者は、また十事なり。第一は時時主に近きを求む。時時主に近きを求める者は時時主より離れざるなり。時時主より離れざる者は自ら必ず主に近被くなり。第二は虚心に明師を探求すること。それ明師はすなわち我を主に近く引く者なり。真經に云う、爾衆は須らく近主の引を求むべし、と。蓋し、明師は幻海の慈航なり、慈航無くして幻海を渡ること能はざるなり。第三は既に明師を得たれば、心悦びて誠に之に服心すべし。悦びて服するは即ち行道の車乘なり。車乘して力を尽くせば、その至るは必ず速やかなり。第四は諸事につき必ず道長の命を聴くべし。或いは世務、或いは道義、或いは取捨につき、必ずその命を尊ぶべし。第五は常に敬畏の心を存すること。敬畏する者は、真主の命禁を凜それ、違ふ所有るを怖れるなり。第六は遵守礼乗。礼乗の事は即ち聖教の五功なり。一切の明悟洞徹は実に聖人の道に因順して得るなり。真經に云う、汝衆人に告ぐ、真主を親愛せんと欲するものは吾が道を遵守せよ、真主は必ず爾等を眷顧す、と。第七は寡言。寡言は言多くして必ず失い以って愆尤を招くを恐れるなり。第八は少睡。少睡は心清め、道を悟るなり。第九は減食飲。減食飲は、嗜欲を寡くし以って心志を益するなり。食は必ずその良を撰びて後に可なり。第十は静居。静居は塵情を遠ざかり世務を捨て、一心に真主に向うなり。この十事を守るものは必ず奇踪異跡を見る。之を守りて常とする者は必ず萬理の顯を見る。一を欠くことあれ則ち行う所は無効なり。到岸の日は必ず無し。

真乗を当に尽きんとする者は、亦十事あ

り。首めはその元に復すこと。元に復す者は真主を識り、真主に親しむ。更に、萬化の本を識る。惟これを識るのみならず、これに親しみ、且つ之を見るなり。第二は世人と和藹すること。それ、和藹とは主に近きことの踪跡なり。和藹する者は萬化を愛惜し、その生を伐らず、善を見ればすなわち遷（おもむ）き、悪を見れば悪（にく）まず。一人たりとも怨みを為さず、一物たりとも孽（わざわい）せず。而して、世人を仁愛し、慈心は普く概ぐ（そそぐ）。人の孤を憫れみ、人の過ちを容れる。第三は世人を親愛すること。親愛とは、人の悪を隠し、人の善を揚げること。人の事を全くす。時に忠言を以って化導し、人をして日に善に遷さしむなり。第四は謙下は衆人を懐視して、皆我よりも善しとし、皆我よりも尊しと為す。敢えて一毫の驕矜傲慢の心を有せず。第五は、貧を楽しむことなり。それ、貧なるものは世人その樂を知らず。ただし、富貴の楽しみと為すを知る。而して、富貴の中に真の苦あるを知らず。人、ただし、貧窮の苦しみと為すを知る。而して、貧窮中に真の楽しみあるを知らず。真の樂は何処にあるか？道にのみ。語にいう、顔子一簞の食、一瓢の飲、陋巷にあり。人その憂いに堪えず。顔子はその楽しみを改めず（論語、雍也第六）。之の謂なり。第六は順受なり。順受は主の前定に順う。困苦危急があると雖も、生死難免の際にして、敢えて一毫の怨尤の心有らず。第七は、嗜欲にして妄為を制さざることなり。それ嗜欲にして妄為を制するものは、積悪の根壞の道にして主に悖るなり。第八は仰頼なり。真主を仰頼する。我に以って後世の路と今生の福を賜うなり。第九は忍辱負重なり。忍辱負重とは、人の忍ぶあたわざる所を忍ぶ。人の受けるあたわざる所を受けるなり。第十は希図の心を起こさず。聖人の云うには、希図の心は万悪の源なり。以上の十事、よ

く持守してこれを遵行すれば、すなわち、道に一心專注す。これ、すなわち、所謂その真乗の功を尽くすなり。もし、求道のものがその真乗の功を尽くすことを欲すれば、必ずその道乗の学を先に習うべし。まさに岐途異嚮に落ちることなし。

**第三章** . 全人を明らかにする。全人なるものは、この三乗を全うし、而して四徳を備えるものなり。四徳とは、善言、善行、謙和、認識なり。この三乗と四徳を全うすれば即ち、その本性を全うするゆえんなり。蓋し、万有は譬えるに一樹の如し。人極、即ちこの樹の果なり。また、万化は譬えれば、一人の如し。人極はすなわちこの人の心なり。人の精粹を全うするは、実に万有を全うするなり。修道者は、もしよくこの三乗四徳を全うすれば、すなわち心は物欲の蔽う所とならず。自らよく真一の体用を知るのみ。真一の体用を知るのみならずして、さらに**真一の全体大用**を見ることができる。修道はここに至りて初めて万功の止境を知る。ただ人をして安逸に在致するのみ。安逸者は、超脱を得て、永久の大慶に帰するなり。（『漢訳道行究竟』同治九年、馬如龍刊。頁四・五の五 - 頁九・十の九）

上の引用の中に、礼乗からはじまり道乗にいたり、さらに真乗に及んで最終的に「全人」の境地が実現されることが述べられている。礼乗、道乗、真乗を終了し「全人」の境地に到達した人間は、きわめて柔和で穩健で他者にたいし優しく、親切で共感力に溢れ、暴力を嫌い、恐れ、平穩に生きる人であることが示されている。「全人」は超能力者ではないのである。あくまでも理想的人間を指している。それは儒教の「君子」や道教の「真人」の概念と重複するものであるということができよう。

経堂教育の最終過程においてジャーミー

(1414 - 1492)の“*ashi‘‘at al-lama‘at*”  
(光明の輝き)を学習することはアッラーの本質をなすところの「愛」を学び理解することである。そうすることで、人間完成に向けての修行者はあらゆる被造物を慈しみ、その存在を保全する能力を獲得すると考えられているのである。

このような「全人」養成の経堂教育が暴力的な共産主義革命と相いれないことはいうまでもない。今日の共産党支配の中国において存続しえないことは明らかである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)馬復初の『大化総帰』とイブン・アラビーの“*Fusus al-Hikam*”

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)『馬徳新哲学研究序説』2014年、3月31日刊行、駱駝舎

#### 6 研究組織

(1) 研究代表者

(松本耿郎)

研究者番号：00159154